觀音經傳訓圖會

三

ハ 5
2676
3

波5
18/6
4-3
ハ5
2676
3

觀音經和訓圖會卷之下

前文之續

無盡意是觀世音菩薩成就如是功德以種種形遊諸國土度脫衆生

是三十三身十九說法の結ぶて惣答とゝ佛無盡意ゝ告のゝなり

○成就如是功德とハ是觀世音ハ如是之三十三身を現して衆生を得度せしむる功德を成就しゝのゝとなり成就ハ物を成就る事なり○以種種形遊諸國土度脫衆生とハ種々の形を以て諸の國ゝ遊巡衆の

生類を度脱するものとなり。遊ハ行とは。度ハ苦を脱するを得させるの文。種々の形を以てとの文と苦を脱するを極楽世界へ度るのを得させの文。三十三身ハ限らず其物ハ應じて百千の形を現じ得脱せしめるものとなり。意ハ種々の形を以てとの文なり。是観音の身を種々ハ現じ変を明らかにするなり。それ妙音菩薩ハ三十四身を現じ給ふ已ハ妙音品ハ観音菩薩ハ三十三身のみなるハ妙音ハ久功徳劣りの文と疑ふ者あるとて結の文ハ種々の形を以と説給へり。観世音を一度礼拝する功徳ハ六十二億の諸菩薩ハ諸の品を供養して生涯礼拝する功徳と正ハ福を得るの等と説給ふ故の文や

是故汝等應當一心供養觀世音菩薩

○是故ハ是故ハと前の文を受て辞なり○汝等應當一心供養以下ハ汝等ハ一心ハ観世音を供養をなしとなり。是無盡意菩薩ハ告て無數の聽衆ハ聞せ供養をするを勧めなり

是觀世音菩薩摩訶薩於怖畏急難之中

能施無畏

此段ハ前の供養を勧めハ就て。更て観音の功徳を説給へなり

○摩訶薩八前に廷を○於怖畏急難之中能施無畏と八とへ怖畏急難之中に於も能無畏を施しのことなり○唐の一行阿闍梨を博学多才にて道徳勝れ給へり。玄宗皇帝常に宮中に召て信仰他に異なり余の僧ども是を妬て一行八揚貴妃と密通せりと跡形なき讒言しるふそ玄宗帝怒給ひて一行阿闍利を果羅國とい所へ流罪せらる。彼國へ都より通ふ路三道あり。一ハ輪地道と て宜人の往来する道なり。二に八幽地道とて旅客商賈の通道へ三に八暗冥道とて罪人を遣を悪道にて七日七夜の間日月の光を見ぬ道なり。一行を大罪の科人なれむとて暗冥道へ追遣しる。是に依て一行阿闍梨を。身に覚なき無実の罪を蒙り。只一人暗冥道を剽

リ往ものるに或八冥々たる江浦に
さまよへり。或八森々たる山径に迷ひて
路を問へ人もなし。聞ものとてハ
澗谷の猿の声。幽渓の鳥の音のみ
あり。若乃沾衣乾あまと心細き言
ん方なけれども阿闍梨を兼て観
世音を尊信せしかば路上普門
品を讀誦して往まよふに。不思議
なるに暗き空に九曜の星現
れて赫々と光を放ち暗冥道も

白昼のごとく明くなりぬるなり。阿闍梨大いなる力を得。是ひとへに観世音の加護なる処なりと。信心肝に銘じ。右手の指と食切左の長の袖に九曜の形を写されぬるなり。今真言宗の本尊とする九曜曼陀羅ハ是なりと有一行傳是のごとく怖ろしき暗闇の路も大難に於ても観世音乃威力にて無畏しめ給ふ誠に尊むべき御事なり

是故此娑婆世界皆號之為施無畏者

○是故ハ前文を受し詞なり○娑婆世界ハ前に註ス○皆號之為施無畏者とハ無畏を施し給ふ故に世界中の人皆観世音を施無畏者と號するゆへなり施無畏者とハ畏無を施を人とするなり

無盡意菩薩白佛言世尊我今當供養觀世音菩薩即解頸衆寶珠瓔珞價直百千兩金

○前文に佛観世音を供養を勧めよと宣ふ。よって無盡意菩薩佛に白て言ハく世尊我今観世音菩薩を供養さんと○即解頸衆より百千両金までハ即ち頸に掛る衆宝の瓔珞の價百千両金ある衆解てとらす義なり。衆宝とハ千宝および衆の宝と珠と間雑る瓔珞なり。瓔珞ハ菩薩の頸に掛る珠の飾なり○價直百千両金とハ瓔珞の價の貴をいへ但し無盡意ハ等覚の菩薩にて位高く掛給ふ

瓔珞も摩尼瓔珞とて。價の限りなく百千兩と定むるあるべし。八大財とゝなり。喩ば百姓万民とゝなるべく。百ゝ限り万ゝ限ゝ非ずんども無量農民とゝを万民とゝ格ゝて百千兩と係ゝ曰ーなり

而以與之作是言仁者受此法施珍寶瓔珞

ーふてもてこれをあたゝくるべしあんやこののちのわどこーのちんぽうえらどみまへ

○而以與之作是言とハ。前文を受て而て以与之是言を作とゝ義なり○仁者受此法施珍宝瓔珞とハ。仁者ハ観世音をさゝと辞受此法施以下ハ。此法の施の珍宝の瓔珞と受るゝの義なり。それ佛又ハ僧ゝ布施をるゝ二種あり。金銀乎銭絹布ゝ衣施を我賊施とゝひ。種ゝの経を續法事をなをと法施とゝり。今無盡意の瓔

珞を布施ーるゝハ賊施とゝるゝあれども法施とゝゝふハ深れもけあをと早くゝ。人間より布施をる時を万ゝ金の瓔珞ゝても賊施なれども等覚の菩薩の功德の布施なれバ法施とゝなり

時觀世音菩薩不肯受之

○時ハ其時とゝ意○不肯受之ハ之を受不肯とゝ義ゝて。観世音の辞退ーるゝなり。此意無盡意菩薩ハ東方不晌世界より来るゝと此會座ゝまりゝ。観音ハ娑婆常住の菩薩なれど我と遠来の無盡意菩薩ゝ何なりとも布施をと願ゝ却て彼菩薩より布施を受るハ道ゝあるべとて。辞退ゝるゝなり

是を佛法にて推功上人とて、意ハ功を推て人に上るとて、義ハ
儒家にて遜讓とて、是ハ遜り讓るとて、意なり。佛菩薩の
上にてもまた辞讓の礼あり。況凡夫の身に辞讓を知ざる人に非ず

無盡意復白觀世音菩薩言仁者愍我等

故受此瓔珞

○復白觀世音菩薩言と、復觀世音に白て言とて、また
無盡意觀世音の辞退しのべて推返して又言なり○仁者ハ觀音を
再びさまと尊み申す○愍我等故受此瓔珞とハ我等を愍む故に此
瓔珞を受よとの義なり○我等を愍む故にとハ無盡意身を卑
下し、衆の聽衆になりうる心をもて、強て瓔珞を供養しのべなり是
無盡意の慈悲心にて、我此布施を受ばゞ四姓八部衆及び衆の群
類も思ふに布施と供養して利益を蒙らんと望べし。若此瓔珞
を受ずんば衆の聽衆も布施をさへ却て望を失ふべきなれば、何卒
我等をもて衆の者と愍て受よと悃に勧めなり

爾時佛告觀世音菩薩當愍此無盡意菩薩

及四衆天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅

摩睺羅伽人非人等故受是瓔珞

○爾時より受是瓔珞まで八佛無盡意の強て瓔珞を勧めを見のひて。観世音に告ぶ八當に無盡意及び衆八部を憐ぶ故ふらの瓔珞を受ぶへと勧ぶなり。俗ふりくを挨拶ぶなり

即時観世音菩薩愍諸四衆及於天龍人非人等受其瓔珞分作二分一分奉釈迦牟尼佛一分奉多寶佛塔

○即時八即ち時ふとる義へ○愍諸四衆より受其瓔珞まで八諸の四衆及び天龍以下の人ふ非ざる人まで哀愍ふて其瓔珞を受ぶとなり

○分作二分と八右の瓔珞を二分て二分ふ作るなり○一分奉釈迦牟尼佛と八二分ふ作る其一分を釈迦如来ふ奉りぶとい義なり。釈迦を梵語ふて繹もれば能仁となる是能仁の字義なり。牟尼も梵語ふ繹もれば寂然となる。寂然八寂ふ居て不語なり。猶阿弥陀経ふ精く註て○一分奉多寶佛塔と八佛の説法ぶ側ふ多寶佛を安置せ寶塔あり。それ八分る瓔珞を奉りぶとなり。斯瓔珞と二ツふ分て佛と宝塔へ奉りぶふ八深た理あれども。早くいで上なく貴た瓔珞なれ八。観世音更て如来と宝塔へ供養ぶなり抑三宝ふ

布施と供養をハ廣大の功徳ハて
現世ハて無病息災乃祈禱とあ
ら来世ハ成佛得脱の縁とあらなれ
ば。其身分相應ハ布施供養すべ
なり。昔信濃の善光寺へ或長者
万燈を献じて如来を供養しける
ハ。一人の貧女見てうらやみ。其身も佛
ハ供養ゝ思へども貧しくれば せん
方なくて。せめて心だろの供養ハと古
衣一枚賣代なりて僅一燈を奉りる

然ハ一時忽ち大風吹来つて長者の万燈を悉く吹消くるハ。彼貧女
乃捧ゝ一燈のゝハ消ざりける。是其信心の深切を天も愍ミ。佛菩薩
も納受ゝ給ふ所なり。されば多くの財物を以て供養をるとも。其心ハ我
身の為とせゝ欲心より施を時ハ功徳薄し。僅の布施なりとも真
実乃信心を以て供養をる時ハ佛も感納あるて功徳深し。昔梁乃
武帝達摩禅師ハ對面有ゝ時。我佛法ハ帰依ゝ。數多乃堂塔
を建立せり。此功徳ハ奈何と問ゝハ。達ノ答て無功徳と言をける
武帝又曰。然ハ我數多の佛像を造て供養せる。此功徳ハ奈何と
達ノ答て無功徳とやされしと。是堂塔を造り佛像を作ゝハ功徳
深くなれども。武帝の心ハ驕り自慢をる意あるゝ故ハ無功徳と

答られなりされば我身の為と思ひ自慢する心ふて布施供養をしで
佛納受しもまど真心ふ三宝と敬ひて供養を奉るなり

無盡意觀世音菩薩有智是自在神力遊於娑婆世界

是初段よりの惣結なり○有如是自在神力とハ七難を解脱しを
三毒を離しめ西願を叶へ三十三身及び種々の形を現ずて衆生を得
度させるふ是の如く自在の神力有るの義なり自在とハ物の意の
侭ふなるる神力ハ不思議なる力なり更なり○遊於娑婆世界とハ

娑婆世界ふ遊ぶとあり遊とハ前ふもいづく遊戯の義ふあるべし此
人間世界へ種々の形を現して影降しまを遊といなり

尒時無盡意菩薩以偈問曰

是ハ無盡意菩薩更て観世音の功德を偈を以て問て曰なり
○尒時ハ其時ふとなるすわて佛観音ハ如是自在神力有て娑婆國土
ふ出るなりと説終りもいい其時ハ前を受る紹て最初の尒時と同ど
○以偈問曰とハ偈を以て問て曰なるすなり偈ハ其德を讃るるすなり
天竺ふてハ加陀と讃とるも同ど意なり

世尊妙相具　我今重問彼

○世尊ハ釈迦如来ヲさと○妙相具とハ妙なる相を具ふと佛を敬ひて号ふ名なり。釋迦如来ハ三十二相八十種好とて妙なる相を具ふ

三十二相とハ一ふ頂髪皆輭二ふ眉間白毫の如光三ふ眼牛王の如く四ふ眼色金睛五ふ音声頻伽鳥の如六ふ舌廣長七ふ咽中三の津液流ろ八ふ味中上味を得九ふ頰獅子王の如十ふ歯白四十一牙白大十二歯齊根深十三ふ肩圓好十四ふ身廣端正十五ふ全身有勢十六ふ両腋下肉満十七ふ両足両腋両肩卍の形有十八ふ皮薄理濃二十九ふ身光二十ふ肌金色の如光澤有二十ふ毛上ふ向右ふ巻り黛色二十二ふ一毛生ず

廿三ふ身縦横等廿四ふ両手膝を摩廿五ふ脚纖好廿六ふ足趺高跟圓廿七ふ足指細廿八ふ足廣廿九ふ手足柔輭三十ふ手足指長廿一ふ足下安廿二ふ身不高不低以上カ八十種好ハ長ければ略す○我今重問彼とハ我今重て彼を問んと。彼とハ観音をさと。重て観音の功徳を問ふ也

佛子何因縁　名為觀世音

○佛子ハ観世音をさす。何因縁とハ何の因縁ふてとく義なり○名為観世音とハ何の因縁ふて名を観世音と為やと問ふなり

具足妙相尊　偈答無盡意

○具足妙相尊とハ妙なる相の尊と具足まします○偈答無盡意とハ偈を以て無盡意に答ふるなり。但し此二句ハ緝綴の辭なり。経家阿難の辭なり。句意ハ妙相の尊なを具まします釈迦如来。無盡意の偈を以て問ふ。又偈を以て答ふるなり

汝聽觀音行　善應諸方所

是より又釈尊の御言なり○汝聽観音行　善應諸方所とハ汝聽観音の行ハ善諸方の所に應ずとなり。所に應ずとハ世三身なり

弘誓深如海　歷劫不思議　侍多千億佛

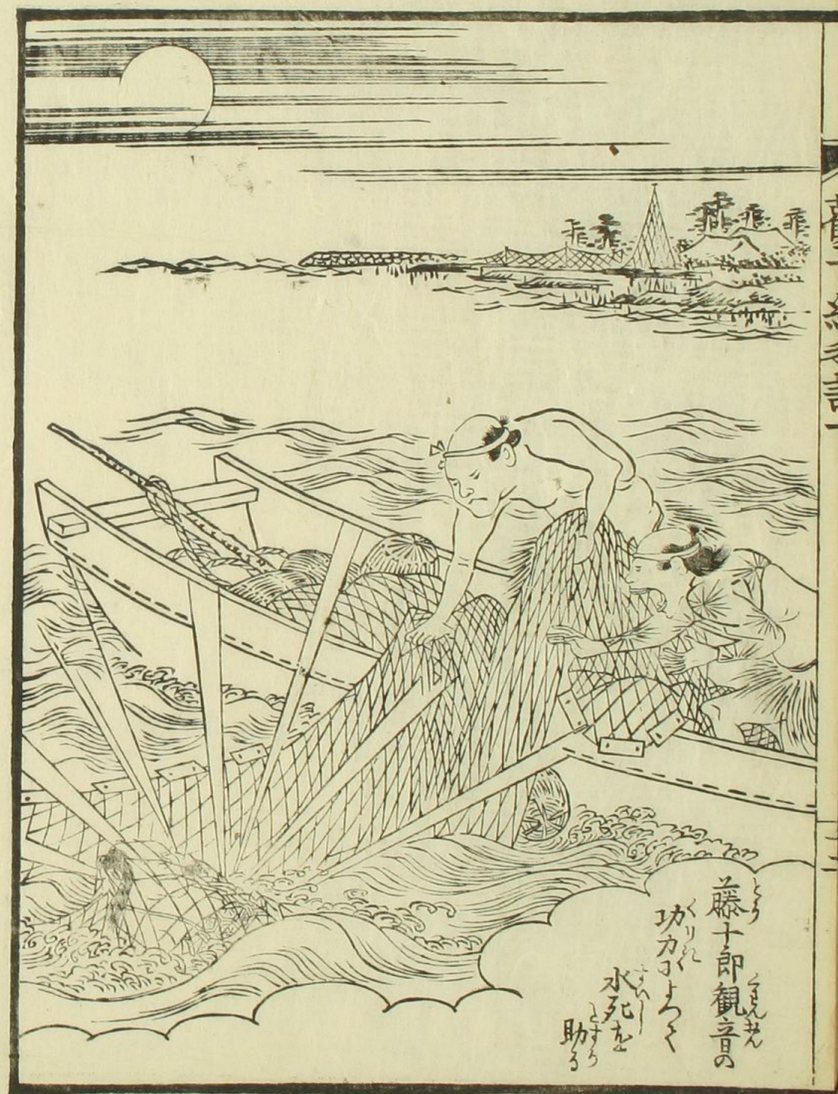
○弘誓深如海とハ弘誓深き海の如しと○歷劫不思議と劫を歷ること不思議とのふ義劫ハ千万年なり。たとへ千万年を歷て観音の功德の弘さ不思議なりと○侍多千億佛とハ多く千億の佛に侍てとのふなり。侍ハ侍ると訓て側に住るなり。千億佛とハ千万億衆生とのふなり。數限なれ佛とのふなり○發大清淨願とハ大清淨願の願を發すとの事。大清淨の願とハ普く人畜を救んの願

我爲汝略說　聞名及見身　心念不空過

能滅諸有苦

○我為汝略說とハ我汝の為ゆ略ち說とゆ義ゑ我ハ釈尊汝ゑ無盡意菩薩ゑ。略とハ十の二ゑ說聞さんとなり○聞名及見身とハ名を聞并ゆ身を見ゆる及ハ共ゆとらゆ日ゑ。是観世音の名を聞御身を見ゆるゑとハ○心念不空過とハ心ゆ念ゑて空ゑ過さゑ。むとの義なり。空ゑ不過ゑとハ月日とおゑゆ過さゑるとゑ○能滅諸有苦とハ能緒の有ところの苦を滅を者ゑなり。惣ゑその者ゑ観世音の御名を聞御身を見心ゆ不断念ゑて空ゑ月日を過さゑゑ。能緒の苦ゑを滅ゑ安樂ゆゑゑめゆゑとの御叟なり

○昔越前國ゆ佐原藤十郎ゑ者ゆ若ゑ妻ゆ死別を身の便なゑ。仍家財を費拂て路銀ゑ。都へ上りて身の在者を求んと江州志賀の里へ到る頃日已ゆ暮ゑ。宿有方を尋んとさゑよゆ所ゆ忽ち五六人ゑ盗賊出来り藤十郎ゑ路銀を奪取衣服をさへ剥ゑ裸ゆなゑて情なく湖水へ投こゑ逃去ゑる。藤十郎ハ其仍水中ゆ死ゑて流れ行ゑゑゆ。夜網曳漁夫沖の方ゆ水中より光り出ゑ怪ゑ。其光を見當ゆ網を打曳寄てゑんで網ゑて重ゑるゑゆゑ。辛ゑて曳上ゑゆ人ゑ屍なりゑゑ。大ゆ驚死ゑ捨んとさゑゑゑ。屍の胸のあゑよゑ光りを放小益紛り星明ゆ透ゑゑんだ。屍の首ゆ掛ゑ守袋より光りを放りなゑ見ゆ依て守袋を取んとさゑゑゑゆ。死人忽息を吹返ゑ南無観世音と



称なるぞ漁夫再び問ふ汝は何國の者ぞと問藤十郎其時生國姓名を告ぐ賊難を逢ふるに絡り且言ふ我賊の為に湖水へ投込れ後人夷と覚ど夢現ともなく暗夜野路を其所なるあづま往処に忽ち後より我名を呼声あるより振顧を尊げ成御僧歩み近寄の人汝生前に人の金銀を借て返さず剰へ父母に不孝なるより非命の死をなし地獄へ墮べきなれども汝が父我と多年信抑せし功徳に依て汝を助け婆婆へ帰らしむるなり以後心を改め三宝に帰依し父母の後世を吊ひ諸人に善を勧め今迄の罪障を拂ひと仰せられより余りの難有に御僧の名を問ふに我は汝が守護観音なりと宣ひ光を放て飛去ると思へば忽夢の覚る心地して目

然用て此船の中多く将〻水死せ〻身の蘇生八全く守袋の観音菩薩の御利益なると感涙を流して語れバ漁夫も奇異の思ひとなり水中より光明の現ぜ〻奇特を語り藤十郎を痛りて堅田なる我家へ連帰り食吏させ古着を与ふ〻て養生させるゆゑ藤十郎其情を感じて厚く礼謝し奉公の望を止て髪を拂ひ長命寺の住僧の徒弟となりて佛道修行し後ハ堅田村小一宇の堂を建立し一宇佛の観世音を安置し父母の後世を吊ひ緒人ハ佛法を勧め八十五才ハて往生の素懐を遂るとゑ〻然ハ観世音大慈大悲の御誓ゑ難有ゝ〻〻

假使興害意　推落大火坑　念彼觀音力

火抗變成池

いのあるもへんどちけとある

是七難の中の火難を重て茲ハ頌し〻なり○假使興害心推落大火坑の二句ハ假使悪人有て害心を興して大なる火坑へ推落んとするとゝ〻義なり○念彼観音力火抗変成池の二句ハ前句乃如く火坑へ推落害せんとすゝも彼観音の力と念ずれバ火坑も変じて池となり身を焼ゝ吏なくゝとなり念の字肝要なり

或漂流巨海　龍魚諸鬼難　念彼觀音力

波浪不能沒

是罰ハ水難と重て須一身り○或漂流巨海龍魚諸鬼難とハ
或ハ巨海ヲ漂流されて悪龍圭毋魚の難又ハ悪鬼羅刹の難わらんを
との義なり巨ハ大と同ジ○念彼観音力波浪不能没とハ彼観音
の力と念ずれバ波浪も船を沈る事能ハず悪龍悪鬼も害をなす
事能ハざることなり波ハ小波浪浪ハ立浪なり没ハ沈むるをいふ

或在須弥峰　為人所推墮　念彼観音力
如日虚空住

是ハ七難の外ヲ別ヲ喩と設て観音の功徳を須ることなり○或在須弥
峰為人所推墮とハ或ハ須弥山の峰ヲ在て人の為ヲ推墮さるゝとも
なり須弥ハ極て山の高大なるものヲ高サ三百三十六万里とあり茲ヲ
須弥といふ喩ヲて須弥山ヲ高大山との事なり○念彼観音力
如日虚空住とハ高山より推墮るゝとも彼観音の力を念ずれバ日輪の
虚空ヲ住するが如く少も身を傷ることなしとあり

或被悪人逐　墮落金剛山　念彼観音力
不能損一毛

是も七難の外乃喩なり○或彼悪人逐墮落金剛山とハ或ハ悪人ヲ

逐れて金剛山より墮落するともとなり。金剛山を鉄圍山とも高山あて世界の垣なりとなり。此ほうを喩ふて金剛山の如く高き所より追落されんかとなり○念彼觀音力不能損一毛とハ高き所より逐落ともとも。其人觀音の力を念じまゐらせ毛一筋をも損ずるの能ハざるなり。少しの怪我もなく喩なり

或值怨賊繞　各執刀加害　念彼觀音力

或ハ値ハ怨賊の難と重て頌し給ふ○或値怨賊繞各執刀加害と八或ハ怨賊大勢有て取繞各刀を執て害を加んとする値ともとなり○念彼觀音力咸即起慈心ハ怨賊害を加へんとする値とも觀音の力を念じまゐらせば咸即ち慈悲の心を起して殺害せずして立去るべしと。なり。怨賊ハ盜賊又ハ謀叛人をいふなり

咸即起慈心

是ハ七難の中の怨賊の難と重て頌し給ふ○或値怨賊繞各執刀加害と八或ハ怨賊大勢有て取繞各刀を執て害を加んとする値ともとなり○念彼觀音力咸即起慈心ハ怨賊害を加へんとする値とも觀音の力を念じまゐらせば咸即ち慈悲の心を起して殺害せずして立去るべしと。なり。怨賊ハ盜賊又ハ謀叛人をいふなり

或遭王難苦　臨刑欲壽終　念彼觀音力

刀尋段段壞

是も七難の中の王難と重て頌し給ふ○或遭王難苦臨刑欲壽終とハ或ハ王難に遭て刑に臨んで壽終んと

欲すればとて義○念彼観音力
刀尋段段壊ハ観音の力と念ずれ
ば刀尋で段々ゝ壊命助るべし
となり。刀の尋で折るるハ前乃七
難の所ゝ述べし○平家の侍主馬
判官盛久ハ妻年観世音と信仰
し。毎日普門品と繍編まるる
る一日も怠るなし。然ゝ平家亡
滅し後源氏へ虜ま鎌倉ゝ引
せられんとせし時敷皮の上ゝ坐し

一心ゝ観世音と念じ。現世ハく刀剣
の下ゝ死ずとも。来世ハ九品浄土へ導
うせ給へとて普門品と只の中ゝ繍編
しくる内太刀とり刀と揚て盛久が首
を斬んともるゝ忽ち金光きらめく
眼くらみ倒れ。是ハ如何と驚く心を
鎮て再び斬ゝ向ふ。光りゝ眼暈て
斬す能ず。刀持手も痺るゝ
覚くる故不審なれど。此首を撿
使ゝ告れば是も奇異のるゝ思ひ

人を替て斬ひるゐ。又光り眼と射く斬夷紙ごとゝかゞ。撿使いよ〳〵紙と盛久が向ひ。作い身ゑ佛像など所持ちるやと問ゑ盛久答て。更ゑ左様の品を持いなど。只只ゑ普門品と續編しいのゝ也と白ゝるゑより。偖い觀世音の護念去のゑゝとして。先く盛久が斬罪伐延し。鎌倉殿へ斯と言上しゝれば。頼朝公素り法華經を深く信じ給へ。奇特の夷ゑ思食。遂ゑ盛久が死罪を免し助命あり。盛久ゝ不思議ゑ刀杖の難と免ゝ。觀世音の御利益肝ゑ銘じて感涙ゑむせ。高野山へ登り入道して天性と保ちゝゝとゝや

或囚禁示枷鏁　手足被扣械　念彼觀音力

釋然得解脱

是も七難の中の枷鏁の難と重て挙ゆ。○或囚禁枷鏁手足被扣械とハ或ハ枷鏁ゑ囚禁示れ手足ゑ扣械を被るとも。その夷囚ハとゝれと訓禁ハいましめられ。○念彼觀音力釋然得解脱とハ觀音の力と念ずれば釋然枷扣とゝも解て脱ゝる夷と得ゑしとなり

咒詛諸毒藥　所欲害身者　念彼觀音力

還著於本人

是ハ七難の外ハ呪詛毒薬の難と須臾の〇呪詛諸毒薬所欲害身者とハ悪人有て呪詛ゆるハ諸の毒薬ハ身と害せんともするとの義なり呪詛ハ邪神ハ祈りて人を害せんともするの。毒薬ハ人を殺す薬なり〇念彼観音力還著於本人ハ観音の力と念ずれば呪詛毒薬の巧となを其本人ハ還て崇り著ゞとなり巧の著ゞと聞もよ〜

或遇悪羅刹毒龍諸鬼等　念彼観音力

あるひハあ〜きらせつどくりうしよきとうねんひくわんおんりき

時悉不敢害

ときふつかんがい

是又七難の中の羅刹の難と重て須臾の〇或遇悪羅刹毒龍諸鬼等と悪羅刹の人ハ前ハ述るゝ毒龍ハ毒気と吐けて人を害せんともする悪龍なり〇念彼観音力時悉不敢害とハ観音の力と念ずれば毒龍悪鬼も時ハ悉く敢て害せざるとなり

若悪獸圍繞　利牙爪可怖　念彼観音力

じやくあくじゆうにようりげそうかふねんひくわんおんりき

疾走無邊方

しつそうむへんほう

是ハ七難の外ハ悪獸の難と須臾の〇若悪獸圍繞利牙爪可怖とハ若虎狼あんどハ圍繞ゞ利牙爪と以て人を害せんと〜怖ろ〜ゑ

時との義なり○念彼觀音力疾走無邊方と八觀音の力と念ずれば怖るゝ獸も無邊方へ逃去となり。無邊方八行方なくなるこゝなり

蚖蛇及蝮蠍　氣毒烟火燃　念彼觀音力

尋聲自迴去

是も七難の外の蛇蠍の難と挙げり○蚖八毒ある虺。蛇八人と螫蛇なり。蝮八くちばゝ。蠍八木ゐ住毒虫なり○念彼觀音力尋声自迴去と八觀音の力と念ずれば。右等の毒虫も声ゐ尋ぬて自ら迴去べしとなり。尋と八觀音の御名と称る其声ゐ引つゞきて自ら迴去とな

雲雷鼓掣電　降雹

澍大雨　念彼觀音力

應時得消散

是も七難の外の雷雨乃難と頌せり

○雲八黑雲。雷八ゝなり。鼓八鳴こと。掣八引とゝ。電八ゐびるなり。降八降こと。雹八大なるあれ。霰と

又物なり○念彼観音力應時得消散とハ右のごく黒雲起
雷鼓電掣電降大雨澍ゝて牛馬犬ゝ等ハ及ぶべき人間の種と
も尽くゝを得ぬ程の天変の難ハ遭とも観音の力を念ぜれば即時ハ
天変止て消散雖とよねるゝ者ゝとなり○七難の外咒詛諸毒薬
より此雷雨の難まぐゝと以前の七難ハ加へて十二難解脱とゝ
衆生被困厄　無量苦逼身　観音妙智力
能救世間苦
是ハ三毒解脱と重て頌ゝなり○衆生被困厄無量苦逼身

とハ衆生困厄とゝ貪欲瞋恚愚癡の三毒の厄ハ困ゝれ無量
苦ゝ身ハ逼りくるゝとゝ○観音妙智力能救世間苦とハ観音
乃妙なる智の力ハ能世間の苦と救ゝ給ふゝ世間苦ハ即ち三毒へ
具足神通力　廣修智方便　十方諸國土
無刹不現身
是ハ罰ハ前の以種々形遊諸國土度脱衆生とゝ文と頌ゝ
偈なり○具足神通力廣修智方便とハ観世音ハ神通力ゝ
自由自在の力と具足のひて廣く智の方便を修ゝの義

○十方諸國土無刹不現身とハ普く十方の諸の國土小刹も形を現ぜぬハなとゝ事なく種々の身を現して衆生を救ひのゝとなり

種種諸悪趣　地獄鬼畜生　生老病死苦

以漸悉令滅

是ハ悪趣及び四苦を滅せしめのゝと頌偈なり○種々諸悪趣地獄鬼畜生とハ種々の悪趣といふて悪趣ハ十界とて十種あれども其中の別を極悪趣三を挙げ地獄餓鬼畜生是なり是を三悪道とも三途とも云ふ○生老病死苦以漸悉令滅とハ生老病死苦と人間の四苦と云ふ所の悪趣の三途四苦も観音神通力ふて漸々ふ悉く滅せしめるゝとなり漸ハ次第々ふとゝ義なり

眞觀清淨觀　廣大智慧觀　悲觀及慈觀

常願常瞻仰

是ハ三觀を以て衆生を救ひのゝと頌ずるなり○真觀ハ空なり清浄觀ハ假なり廣大智慧觀ハ中なり此空假中三觀皆慈悲の心より生ずと三觀ふ就て解あれども吏長ふて略を○悲觀及慈觀とハ観音ハ慈悲を以て有縁ハふ及ぼし無縁の衆生を

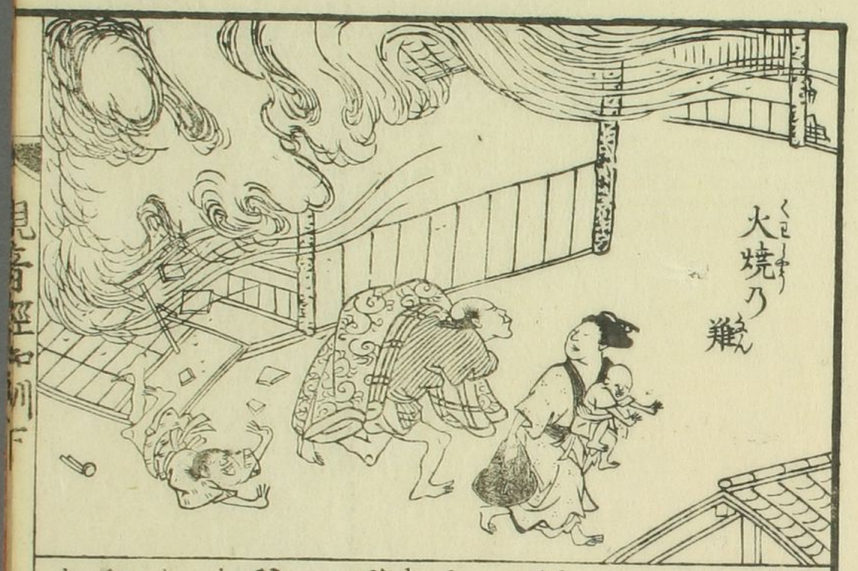
も救ひ給ふ其慈悲の二字を観の字を添へて謂あれども早く
云た観八云るを慈悲の心を以て衆生を観拔苦與樂とて苦
を拔樂を与へ給ふ悲観八拔苦慈観八與樂なり○常願常
瞻仰と八常に願ひ常に瞻仰ぎ奉る義にて右のごとく五観を以
て衆生の苦を助け給ふ観世音なれバ常に願ひ功徳を瞻仰べしと
○傳に曰真観八準脈観音なり是空観とて諸法皆空なり
と観ずるを云真観とハ○清浄観八土面観音なり是假観と
空に依て假に形を得他の者を清浄なるゆへ故に清浄観とハ十一
面と八佛果の十地を十面と果を一面とを又金剛合掌とて両手乃
指を組合しる指の頭を十面と是に行者の一面を加へて十面とを

もりて持ち給ふ瓶の水を清浄水と号て天竺にて八戦場へ向ふに瓶に水を
入てもつ観音八修羅道の者をも解脱せしめ給ふ故に其飢渇を救ん
為に瓶水を持給ふ○廣大八如意輪観音なり是六観音の惣躰
にて中道を周ぬる故中観とハ如意輪八其徳如意宝珠に比をを
以て号なり○智慧観八馬頭観音なり是畜生道の者を救
ひ給ふ故畜生に准じて馬頭の形を現じ給ふ畜生の愚癡とも観音の
妙智に化度せらるゝ故智慧観とハなり○悲観八千手観音なり
具に云た千手千眼にて又手の持物を加へて三千とを是一念三千と
観音の一身に具足ス給ふ比喩なり千手観音八地獄道の苦を救ひ
給ふ故に悲観と拔苦とをなり○慈観八聖観音なり聖音

衆聞ごとに世界の音を知一切衆生を救ひゝ以て聖観音とハヤ
なり。別て八餓鬼道の者を救ひゝ故に慈観と與樂という。六観
音の六道化度ハ聖ハ餓鬼如意輪天准胝人十一面修羅千手地獄畜生馬頭

無垢清淨光　慧日破諸闇　能伏災風火
普明照世間

是ハ観音の功徳の光を頌し○無垢清淨光とハ垢無清淨光と
いゝ義ふて観音の功徳を喩へなり。白衣と白無垢とハ交る〻金銀を
無垢とゝも偈の無垢とハ意なり○慧日ハ智慧を日に喩へ



破諸闇とハ諸の闇を破とゝ也。観
音の功徳の光智慧の日を以て諸の
煩悩の闇を破ることなり○能伏災
風火とハ旋風災火災とも伏ふと
なり○普明照世間とハ普く明か
世間ふ迷ふ心の闇を照しゝふとの義ゝ

非心體戒雷震　慈意妙
大雲　澍甘露法雨　滅

除煩悩焔　○悲體とハ一切衆生の種〻罪科を作るを。觀音乃悲くのかく體として戒ハ戒而て菩薩ハ五百戒又ハ千五百戒を持つ也。衆生の破戒者を戒めて雷震とハ雷の鳴震ごとしとの義にて。菩薩の嚴重に戒を持つこと。破戒の者ハ雷の震ふが如く怖ろしとのたまなり○慈意ハ一切衆生を慈しみ給ふ意とく義妙大雲とハ觀音の衆生を慈しみ給ふ意の妙なるをハ大なる雲の天に在て世界乃萬物を覆ふごとく潤しの身ごとの喩なり○澍甘露法雨滅除煩悩焔の二句ハ甘露の如き法雨を澍て煩悩の焔を滅除すことなり

諍訟經官處　怖畏軍陣中　念彼觀音力

衆怨悉退散　是ハ諍ふ公事軍戦等の難を救ふことを頌しなりと○諍ハあらそひなり。訟ハうつたへなり。經官處とハ役所へ出て公吏の裁許を受るなり○怖畏軍陣中とハ戦場に臨し鳥炮箭などの雨の降ごとく怖畏なきをいふ○念彼觀音力衆怨悉退散とハ公と公と論の諍ひ又ハ無体なる公吏を言かけられて聽所へ出或ハ軍の陣中に臨むおりの怖畏ある時彼觀音の力を念ずれバ衆の怨も悉く退き散ずべしとの義なり

妙音觀世音　梵音海潮音　勝彼世間音

是故須常念　○妙音觀世音梵音海潮音とハ何心なくて

南無観世音と唱へて一心三観の智を以て妙音を聞ば大海の潮の音の遠く響くが如く其唱る音を應じて観音感應まのあたりなり。梵音とは清き音なり義海潮音とは海の潮の音なり○勝彼世間音是故須常念とは観世音と唱る音は彼世間の琴琵琶笛其余萬の音に勝て功德深く是故に常に唱念べしとなり

念念勿生疑　觀世音淨聖　於苦惱死厄

能為作依怙

前の文に音声に就て観音の感應あるのを明し此文に衆生の疑を止むる義を顕す○念念勿生疑観世音淨聖とは念々に感應します況常に念ずる者利益を蒙らんの疑なしと云淨聖とは淨聖と観音の德を尊び号なり○於苦惱死厄能為作依怙とは衆生の苦惱に於ても死厄に於ても能衆生の為に父母と作て救ひ守となり依怙とは依怙とよまて父母のなり。俗に依怙贔屓とも又母の我子を負ふ如くなり○観音衆生を子のごとく慈しみ

具一切功德　慈眼視衆生　福聚海無量

是故應頂禮

○具一切功德とは観音の一切の功德を具するの義なり○慈眼視衆生とは慈悲の眼

我以て衆生と視のゝ〻あり○福聚海無量とハ。観音の功徳を
福の聚るゝ事大海へ水の聚るゞ如く無量となり。それ大海ハ高川
流れ入ども潮増ることなし。旱魃の時も減ることもあり。観音の功徳
も其如く福を普く衆生ゝ与へども減ずることなしとの喩を以て
福聚海といへり○是故應頂禮とハ是故ゝ應ゝ頂礼礼拝すべき
なり○抑此御経中の文何をゝ疎ハあれども。別て此四句二十字を
此経中の肝要骨髄とて大事の文なり。此二十字ゝ就てハ天台真言
両宗ゝ相傳の習ひ有とぞ。又這四句ゝ菊水延命の口傳とて支
あり。昔周の穆王の時慈童と云者。過て王の枕を越ければ群臣
詮議して其罪死刑ゝあるべきと衆議一決して其旨を奏するゝ

穆王、愛童の吏あれば不便に思食、死罪を宥め南陽縣の徹縣山といふ遠所配所へ流罪にぞせられける。其別れに穆王釈尊より普門品の中の妙文、慈眼視衆生福聚海無量の二句と慈童に授け給ふ。穆王釈尊より經と授る吏は前に記す。慈童は右の偈を授け配所に赴き折しも溪に咲くる菊の葉に右の二句の文を書き。其葉に露を嘗くるに味ひ甘露のごとく。五穀を食せざれども更に飢るうれなし。遂に彭祖仙人となり七百歳の壽を保てりとぞ。彼偈を書し菊の葉の露の滴り谷川へ流れ。其下流を汲で飲し民皆百歳の齢を保しとぞ。世に菊慈童といふは彭祖仙の吏なり

右の故事を菊水延命の呂傳といふ。緘に妙經の奇特ぞ難有き

尒時持地菩薩即從座起前白佛言

○尒時は最初おりてどく尒時といふて○持地菩薩を貌くあれども早くいふて地藏菩薩なり○即從座起前白佛言とは即ち座より起て前で佛に白て言とふ義なり。釈尊觀音の功德を貌終の尒時即ち座より起て佛に言の如

世尊若有衆生聞是觀世音菩薩品自在之業普門示現神通力者當知是人功德不少

○世尊とハ佛をさす○若有衆生とハ若衆生
有て是観世音の自在之業普門示現まします神通力を聞者ハ
この義なり。普門示現とハ三十三身及び種々の形を現して諸の國土
を遊行まします○當知是人功德不少とハ當ハ知是人功德を
蒙ること少からざる者なり是人とハ右観世音の神通力を聞く人々

佛說是普門品時衆中八萬四千衆生皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心

是一部の惣結なり經家阿難の辭なり○佛說是普門品時とハ

佛是普門品を說まします時とハ義なり○衆中八万四千衆生とハ
衆の聽衆の中の八万四千の衆生とハ強ち八万四千人と限
らずあるべけれど。八万四千と言ハ深き謂あり。一切世間の人の心中を
八万四千の塵勞と具へ。これ因て一身の毛孔も八万四千なり又如来の
法門も八万四千なり。是八万四千の法門殘らず衆生の八万四千の塵勞
を化度しまします○皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心
とハ八万四千の聽衆が普門品を說ましますを聽て皆菩提心を發せり
なり○無等等とハ等なる者無等なるを義して佛菩薩の
位の比なるをいふなり。俗ハ此上もなき位とのみなり。般若心經
ハ無等等呪とも。此上も無呪とも義して此經文も門ト意なり

○阿耨多羅は梵語耨羅とも無上と云義○三藐は梵語耨羅
とも成等と云義佛菩薩と等覺と字義なり○三菩
提は梵語耨羅とも正覺と云義約て云へば無上成等正覺
の心を發すと云事なり。億兆の衆生は佛の觀世音の功德神通力
を說の事を聽て大菩提心を發ぜりとなり。真に觀世音菩薩の
廣大無邊の御利益又は經文の意味深長は一紙上に述盡し難と
いへども。茲に万歩一を和解して婦女童蒙を諭さんと者あり。信ぜん
尊むべしと甫云

觀音經和訓圖會卷之下大尾